

宗教リテラシーを身につける授業の開発 —宗教知識を活用する場面を想定したマンガ教材—

川瀬 寧々

千葉大学大学院教育学研究科修士課程

グローバル化社会に向け、語学教育だけでなく、より文化の違いを意識した教育を行うべきである。文化の違いを生み出す要因の1つとして、宗教が挙げられる。それは、宗教により規定される生活習慣が文化の形成に影響を及ぼしているためである。文化の違いを理解するために宗教の知識は欠かせないものだ。しかし、学校教育の中で、実践的にどのような場面で宗教が必要になるかを教える機会はない。そこで本研究では、宗教リテラシーを身につけることを目的に、生徒がグローバル化社会の中で宗教の知識を活用したり、宗教の知識を踏まえて行動したりすることを目指したマンガ教材を開発し、実践を行った。実践を通して、マンガ教材を用いることで授業の内容を可視化することや、生徒自身が当事者意識を持ち授業に取り組むことが可能となった。また、生徒の宗教に対する考え方にさまざまな変容をもたらすことが可能となった。上記の2点が成果として挙げられる。
キーワード：グローバル化、宗教教育、宗教リテラシー、マンガ教材、文化の違い

1. 問題の所在

1.1. グローバル化する日本の社会

グローバル化とは、国を越え、人、物資、金銭、情報の流れが活発になることである。遠藤 (2005) は、グローバル化が進んだ社会では「1つの大きな社会になり、政治・経済・文化・社会のあらゆる次元において、言語や価値観、文化や習慣などが異なる『異質な他者』との相互交流が不可避¹」となると述べている。「異質な他者²」というのは、稲垣 (2002) の言葉である。グローバル化が進むことによって、他国の企業とビジネス上の関わりを持ったり、市場に様々な国の商品が流通したりする。グローバル化が進んだ社会において、人は生活のあらゆる場面で他国と接することになるのである。このように、人や物資の移動や金銭のやり取りが国境をまたいで活発に行なわれ、人々が他国と接しながら生活を送っている社会をグローバル社会という。

日本でもグローバル化は進展している。日本の企業の海外進出が進んでいることが良い例だろう。グローバル化する日本の社会について、遠藤 (2005) は「そこではいろいろなことが予測困難で、不確実性が高まる。諸外国に比べて比較的均質的とされた日本社会においても、公共乗り物や居住区、食事の場、職場・学校で外国人と隣り合わせになったりすることはめずらしくなくもはや日常化しているときえ言える。」³と述べている。遠藤

が言うように、グローバル化が進むことにより、日本人が外国人と関わりを持つ機会は、日常の中で確実に増えていくと言える。例えば、道を歩いていると外国人観光客をよく目にするが、道を聞かれたり、一緒に写真を撮って欲しいなどというように声をかけられたりすることがある。また、外国人が多く訪れる場所の食事の場では、日本でもハラルマークがあり、ハラル料理が提供されている。

1.2. グローバル化社会で「共存・協力」を目指して

グローバル化が進む社会に必要なことの一つとして「共存・協力」があげられる⁴。グローバル化社会の中の「共存・協力」について文部科学省は、「国や社会の間を情報や人材が行き交い、相互に密接・複雑に関連する中で、世界や我が国社会が持続可能な発展を遂げるためには、環境問題や少子・高齢化といった課題に協力しながら積極的に対応することが求められる。このような社会では、異文化を背景に持つ者や自然と共に生きることができる寛容な精神を涵養することが求められる。」⁵と整理している。文部科学省のいう通り、「異文化を背景に持つ者や自然と共に生きることができる寛容な精神」を持つことは、これからの社会にとって欠かせない能力と言える。

グローバル化社会と学校教育について影山 (2015)⁶ は、重要な点として、他者との関わり合いを挙げている。「ひとつは、他者との関わり合いそのものの重要性である。(中略) しかもそれは、その人たちのバックグラウンドや培ってきた価値がからむことから、必ずしもわかり合えるとは限らない人たちとの関わり合いである。こち

Nene KAWASE : Development of a Lesson for Learning Religious Literacy : Manga as a Teaching Materials Assuming Scenes Which Needs Religious Knowledge
Graduate School of Education, Chiba University

らから出かけていって交流することもあれば、気がつけば属している集団そのものがグローバルの様相を呈していることすら、これからの社会では想定される。」⁷と述べている。

また、「学校教育においてはまず個々の生徒が自分自身を見つめ肯定的に認識することに始まり、他者と関わるなかで自己を成長させていく長期的過程のなかで、自分たちの住む地域に次第に目をやり、他の地域との対比によって自分たちの地域を相対的に眺め、活動の範囲を拡張していくことが現実的であろう。(中略)他者を理解する、他者に寄り添うということは、自己を棄てることではない。自己と他者の関わりを俯瞰的にみることが、グローバル化社会において大切であろう。」⁸というように述べている。「他者を通じて自己を知る」という視点が教育では重要となり、「他者との関わり合い」を経ることは、寛容な精神を持つことに繋がると考えられる。異(2017)⁹は、グローバル化社会の課題について述べている。その課題の1つとして「スウェーデンやオランダのように、市バスに乗っても街角で人に話しかけても言葉(英語)が通じ、外国人訪問者が不便なく親しみを感じる社会にするのか」が挙げられている。この課題を解決するために異は「達成には中学・高校の英語教育の改善に委ねるのが望ましい。そのためにはまず、社会や家庭に英語が本当に必要であると認識してもらうのが前提となろう。」と述べている。社会の認識もおそらく同じであり、英語教育に向けられた期待は大きい。英語教育の目的として、英語力を上げることや英語の必要性の再認識が大きくあるのだろうが、グローバル化社会に対応できる人材を育成するために重要な視点が他にもある。それは、文化の違いを学ぶことである。文化の違いを学ぶことは、「外国人訪問者が不便なく親しみを感じる社会にするのか」という部分にもつながる視点である。外国人が日本で不便と感じる場面では、言語の問題だけではなく、文化の違いも問題としてある。しかし、グローバル化の対策として安易に掲げられているのは語学教育であり、文化の違いに重きを置いた教育はあまりなされていない。学校教育は、グローバル化社会に向け、文化の違いを意識した教育を行うべきである。

1.3. 日常の中の文化の違い

文化の違いを生み出す要因の1つとして、宗教が挙げられる。宗教により規定される生活習慣が文化の形成に影響を及ぼしていることがある。例えば、イスラームを信仰する人々は、イスラームの聖典であるコーランの教えを守りながら、生活している。

現在の日本社会では、隣人や、友人、仕事の取引先などで、異文化を持つ人々が身の回りにいることは珍しいことではない。宗教と文化に対する知識がないがゆえに

宗教に対する理解が足りない態度をとり、相手に嫌な思いをさせてしまうことを避けなくてはならない。そのため、異文化とその背景を理解する必要がある。

1.4. グローバル化社会に適応可能な人材と教育

グローバル化社会に適応していく人材を育成していくために、平本(2015)¹⁰は、一般社団法人グローバル教育研究所理事長、株式会社グローバル教育代表取締役社長の渥美育子に取材を行っている。渥美が、グローバル化への対応力を獲得できるよう考えた提案の内容のうち本論文と関わりの深い2つの提案を下記に示す¹¹。

①価値観の違いに着目して世界を見よ

何十億という価値観の違いの人たちが、それぞれどこに、どのように分布しているのか。その価値観の違いによって、どのような問題が起きているのかを知る。

②学んだことを実践で活用せよ

グローバル社会の実相を理解したら、各自のフィールドに活用して結果を出す。ビジネスなら利益に結びつけること。さらに、積極的に新しい価値を生み出し、グローバル社会における日本の地位を高め、世界への貢献を目指す。そういう人材を大量に輩出しない限り、日本の未来はない。

グローバル化社会に適応していく人材を育成していくためには、上記の内容が扱われるべきだと考えられている。先述した通り、価値観の違いに着目することは、異文化理解をする上で重要な内容であると考えられる。また学んだことを実践で活用することを求められている。これらの提案の内容は、教育の中でも欠かせないことである。実際に、グローバル化を視野に入れた教育はどのようになされているか次の段落からみていく。

グローバル化を視野に入れた教育の具体的な実践例の一つとして現代社会の授業実践を見ていく。張(2006)¹²は、高校生に向けての授業として、ドイツ人、マレーシア人をゲストとして呼び授業を行ったA高等学校を取り上げ考察している。この授業の目的は、教科書を読むだけでは知ることができないような知識を、異文化を持つ人々と触れ合うことで習得することや、文化に対し、興味関心を持てるようになること、異文化理解や国際協力意識を持つこと、自国への肯定または否定を行うことである。これらの目標は授業の中で達成されているようであった。ゲストとして異国のの人々に話を伺うことで、ただ知識を習得するだけでなく、異国の人々の存在を認識でき、より生徒の興味を引き出したのではないかと考えられた。しかし、自身と異なる文化を持つ

人々が共存していく未来の想定がうまくできていなかったのではないかと感じた。これからの日本の社会で生活する中で、外国の人と交流を持つことは増えるということ念頭に置きながら授業はなされていないのではないだろうか。現代社会で扱うのなら、これからの社会について結びつける帰結がなされても良かったのではないだろうか。生徒自身が異国の人々と関わることになったらということを考える内容を扱うべきではないだろうか。例えば、イスラームを信仰する人と待ち合わせをする際、礼拝の時間に気を配り待ち合わせる必要がある。この実践は、生徒の中で、良い経験や機会であったことは間違いではないのだが、生徒のこれからのより結びつけても良いと感じた。また、自国の文化に関して、より意識的に知る機会があっても良いとも感じられた。

グローバル化社会に適応可能な人材を育成するために、張 (2016) で扱われた授業のように、異文化に対する理解に該当する内容を視野に入れなければならない。文化の多様性や価値の多様性に気づき、多様な背景や価値観を持った人々の存在を知ることを目的として扱うことは、グローバル化社会に適応可能な人材を育成するために必要である。

異文化に対する理解の達成を行うために、宗教を取り扱いたい。なぜ、宗教がふさわしい内容であるかという点、文化の違いの根底に宗教が内在することが理由として挙げられる。しかし、日本人一般にとって文化の違いの根底に宗教が内在することに対する自覚は薄い。その要因として、日本人一般が人々の宗教観の中に宗教と文化の関わりがあるという可能性を知る機会の無いことが挙げられる。また、グローバル化社会に向けて宗教の内容を扱う教育は日本では、いまだなされていない。

1.5. 宗教リテラシー

本論文が掲げる、グローバル社会に適応可能な人材を育成するために扱う宗教の内容は、知識理解を目指すことのみを目的とはしていない。宗教を理解した上で、宗教の知識を日常にどのように活用を行うことができるのかということに焦点を当てるべきである。宗教を理解した上で、宗教の知識を日常で活用することができる能力を宗教リテラシーと呼ぶことにする。また、宗教リテラシーという言葉には、どうしても宗教を学ぶことに抵抗があるような人々にも配慮した言い方でもある。山中・藤原 (2013) では、『理解』という言葉には、『理解を示す』『認める』というニュアンスが伴われがちです。そのため、宗教が対象になった場合、理解を求めることは、時として押しつけがましくもなります。¹³ という視点も加わり、「理解」という表現をむやみに使用しない配慮を行い、「宗教リテラシー」という言葉をこの論文内でも用いることにした。リテラシーとは、「適

切に理解・解釈・分析し、改めて記述・表現するという意味である」¹⁴が、本研究で扱う宗教リテラシーとは、宗教の読み書き能力、つまり、「社会生活のさまざまな場面で遭遇する事態に対し、適切に対処するための判断材料となる宗教知識、ならびにその運用能力である」¹⁵。

なぜ、「宗教リテラシー」が必要なのか整理する。宗教は、個人個人の中での価値観や生活スタイルなどにも影響してくる大きなものである。人によっては、宗教に対して何も気にかけることなく生活している人もいる。他方、そうではない人たちにとっては、宗教は個人として本当に大事にしているものでもあり、生活習慣を決定する重要な軸となる場合もある。グローバル化社会では、多様な宗教文化を持つ人が交わる社会となる。これからの社会を生きるためには、相手・自分・社会が持つ宗教観、それらを通して価値観や生活が決定されることもあることを理解し、かつ、そうではない場合もあることを理解しながら、社会や対人コミュニケーションのなかでうまく生きていくための能力が必要になると考えられる。そこで必要となる能力が「宗教リテラシー」だ。

実践的にどのような場面で宗教リテラシーが必要になるかを教えることや、生徒に考えさせることで、宗教を持つ人々に対して配慮を行える能力を伸ばすことが可能となると考えられる。

宗教リテラシーは、宗教を信仰していることで身につく能力ではない。例えば、イスラーム教徒の人は、イスラーム以外の宗教に対する知識や理解、その運用能力を学ぶべきである。キリスト教徒も仏教徒も同じことが言える。宗教を信仰しているから、自分とは異なる信仰心や宗教に基づく態度についても必ずしも理解があるわけではない。

特に、日本人一般の宗教観は世界の中でも特殊であるため、特定の宗教を信仰する国々の人々よりも、宗教、信仰に対する理解が乏しいのではないかと。特定の宗教を持つ国で必要とされる宗教リテラシーと日本人一般が身につける必要があるとされる宗教リテラシーは異なると考えられる。

日本人一般が、宗教リテラシーを身につけるためには、まず日本人一般の宗教観を知る必要があると考える。教育の中で行われる宗教の授業は、「宗教がある」ということに着目しており、「宗教がない」ということがどのようなことを学ぶことを知る機会はない。日本人一般の宗教観を知ることで、日本人一般のように信仰するという意識が薄い人々でも、信仰する気持ちを理解し、宗教、信仰への理解を高めることができるのではないかと。

宗教リテラシーを身につけるための内容として、宗教知識を教授するだけでなく、その知識を正しくどのように発信、運用して行くか、社会に出て宗教リテラシーが必要とされる前に、学校教育で学び、身に付ける必要

があると考えられる。

宗教リテラシーを身につけるためには 3 つの段階がある。この段階に沿った内容を授業では扱っていく。

第一段階は、自分たちの生活スタイルや価値観に宗教が関与していることを知る段階である。自分たちの生活スタイルとは、日常の中で宗教との関わりを意図している。例えば、食事や服装の宗教的規定、お宮参りや七五三、成人式などの通過儀礼、お盆や初詣の行事である。日本人の中でも宗教への信仰心には個人差があることがわかる。毎日、仏壇や神棚を拝む人もいれば、たまに拝む人、全く拝まない人もいたり、神を信じる人もいれば、仏を信じる人、神も仏も信じる人もいたりすることが読み取れる。また、日本のように、神も仏も信じる宗教文化を持つことは世界的に見ると、珍しいと言える。日本人にとって、世界から見た日本人の宗教観、信仰心を知ることが、これから様々な宗教、宗教を基盤として作られた文化を持つ人と関わりを持つ時に必要になる宗教リテラシーになる。

また、日本人一般が持つ宗教観や信仰心がどのようなものか知るだけでなく、日本人一般が宗教に頼りたくなるとき、異なる宗教を持つ人とどのように違うか、同じかについても扱うこととした。人間にはどうすることもできない超越的な力という言葉をキーフレーズとして、読み解くことで、宗教、信仰の在り方を見つめ直すことができるのではないかと考えた。授業実践では、そのような宗教の力を意識することが多い「日常」の場面を通して宗教を読み解いていくべきである。まとめると、第一段階では、日本人一般は、お宮参りや七五三、成人式などの通過儀礼、お盆や初詣の行事を通して、生活スタイルと宗教の関わり、「いのち」を通して自分たちの価値観と宗教が関わると知ることの内容として示した。

第二段階は、外国の生活スタイルや価値観に宗教が関与していることがあることを知ることである。これは日本人だけではなく、日本以外の国の人々も培うべき能力でもある。宗教は多様で、食事や服装に関し制限されていることも宗教によって異なり、またその宗教的根拠も宗教に基づきつつも様々である。イスラームは豚を食べるはいけないことが有名である。その根拠として、イスラームの聖典、クルアーンに理由となる内容が記載されている。イスラーム教徒は、卑しい生き物とされる豚を禁止されていることを読み取ったのだった。

また、ヒンドゥー教では、牛を食べるはいけないが、それは、牛は神に捧げる生贄であり、神聖なものであったからであった。同じ食べてはいけないという決まりでも、理由は異なるのである。

日本人の中には、禁止されているという事実のみを知り、宗教に対して知っている気になってしまう人もいたり、かもしれない。しかし、なぜ禁止されているのか知るこ

とは、宗教リテラシーを身につけるために必要な視点ではないだろうか。上記のような諸宗教の背景をもとにした知識を理解すること、また、第一段階同様に「いのち」について、今度は、日本人一般が持つ宗教とは異なる、宗教を用いた価値観を通して読み解いていくことを第二段階では目指すべきだと考えた。

第三段階では、第一段階、第二段階で取得した、日本人一般の生活スタイルや価値観に宗教が関与していることがあることを知る能力に加え、日本とは異なる宗教を信仰する人々の生活スタイルや価値観に宗教が関与していることがあることを知る能力、多様な宗教を持つ人々との交流をうまく行えるようになるための能力を培う必要があると考えた。そのため、実際に宗教を持つ人と関わりを持つときに気をつけるべきことを、具体例を通して考えてみる。

例えば、多様な宗教を持つ人たちが集まる場での食事会では、食べ物やお酒、服装に気をつけなくてはならない。多様な宗教を持つ人たちと予定を合わせるとき、ミサや礼拝の時間を気に掛けなければならない。また、イスラームやヒンドゥー教では、子どもの頭は神聖なものであるため、むやみに触ってはならない。そのため、子どもに対して何か褒めるときにむやみに触ってはならない。上記のような、日本とは異なる宗教を信仰する人々の生活スタイルに関わる事例に気をつけられる人材の育成を行うべきである。

また、行為だけでなく、心情面にも配慮を行わなくてはならない。人間の価値観を形成する際、宗教がその根幹にあることがある。特に、「死」に対しての内容を扱う際、価値観の中に宗教性が見られることが多くある。

人間の生きる過程の中で、宗教が大きく関与するのは、行事や礼拝だけではないことを知る必要があり、それを知ることによって、他宗教よりも宗教に馴染みがない日本人一般でもより深く宗教と向き合うことができると考えられる。宗教の知識を知って行動できるだけでは、信仰を持つ人の心情を思いやって行動できているとは明確にいうことができない。そこで、第一段階では、信仰に対しての感情を知ることや宗教がどのように基づいて価値観を形成しているか知ること、より多様な宗教を持つ人々との交流をうまく行えるようになることが必要だと考えたが、生活の中で実際に知っている宗教の知識を活かすことができる能力を第三段階で扱う。

2. 研究の目的と方法

2.1. 研究の目的

グローバル化社会に向け、より文化の違いを意識した教育を行うべきであると考えた。中でも、本研究では、宗教に着目した授業を行う。その理由は、学校教育の中

で、実践的にどのような場面で宗教が必要になるか教える機会が必要であると考えたためである。上記のことを踏まえ、本研究の目的は、宗教リテラシーを身につける授業の開発と実践を行い、教材の有効性や課題を明らかにすることである。

2.2. 研究の方法

グローバル化社会の中で活用できる宗教の知識やそれを踏まえた行動を、マンガ教材を通して、生徒が行うことができる教材を用いた。マンガ教材を用いる理由は、宗教の取っ付きにくさや負のイメージを、マンガを通して払拭することやマンガを通して宗教をデフォルメ化することによって生徒の関心を引くことが可能になると考えられるためである。

宗教リテラシーを習得できたかどうか判断するために、1.5. で設定した3つの段階を活用する。3つの段階を達成できれば、実践の効果があつたと評価する。これらが習得できたかは、授業前と授業後に生徒へ実施したアンケート、授業の感想、授業内における生徒の様子で判断していく。

3. 授業の開発

3.1. マンガ教材の開発

宗教を信仰している者でなくても、宗教について主体的に考えることを行いたいため、本実践では、吉川(2005)¹⁶のようにナラティブアプローチをマンガ教材に取り入れた。ナラティブアプローチとは、「物語の中に自分が入り込み、その場面において自分がどのように行動するかを個人が保有する知識を活用することで主体的に考えさせる手法である」¹⁷と定義されている。また、より授業に適した教材を用いるため、本実践では既存のマンガではなく、オリジナルの学習マンガを用いた。

吉川(2005)は、「記述が少しの会話と絵で成り立っているので、解釈に多義性があり、それをむしろ活かすことができる」¹⁸というように、マンガ教材は解釈の多義性を活かすことができると考えている。解釈の多義性をより活かすことができ、自分の意見を可視化させるためには、何か工夫が必要であると考えた。そこで本授業では、図1、2のような書き込みが行えるオリジナルマンガを作成した。また、物語の中に自分が入り込みやすい設定として、学生の留学をテーマとした物語を作り上げた。ナラティブアプローチを円滑に行うことができるように、物語の中に4つの問いを用意した。本研究では手法の検証として、マンガ教材は宗教の取っ付きにくさやマイナスなイメージを、マンガを通して払拭すること、宗教を、マンガを通してデフォルメ化することによって生徒の関心を引くことができたかを明確にしたい。



図1 「日本の宗教スタイルってどのようなもの？」



図2 「日本人が言う無宗教ってどのような意味を持つの？」

また、マンガを通すことで、日常生活の中で宗教の知識を扱うことを念頭に置き、生徒が活動できたかにも着目したい。

3.2. 授業の目的

宗教リテラシーを高めるために、授業の具体的な目的を3つ設定する。①日本の宗教文化や価値観を知り、それを他の宗教観を持つ人々に語れるようになる。②宗教を信仰しているという意識が薄い日本人一般でも、宗教はなぜ信仰されているのか、「死」をテーマにして、理解できるようになる。③信仰への理解や宗教に対して寛容な心を身につけることによって、多様な宗教を持つ人々との交流をうまく行えるようになる。上記の3つは、主に、1.5.で設定した段階のうちの、第1段階を達成するために設定した。

①について、例えば、日本とは異なる宗教を信仰する人々の人は自己紹介を行う際「あなたの宗教は何か」と

質問をし合うことがある。この質問をする意図は、自分が宗教に関する配慮が必要な人間であることを相手に伝えるため¹⁹、また相手の信仰に対して配慮するためである。しかし、ほとんどの日本人は、国際的な交流をする際、上記のことに気をつける視点を知る機会を設けられていないため、宗教を信仰する人々よりも配慮が欠けてしまう可能性がある。また、「あなたの宗教は何か」と問われたとき、日本人の多くは「無宗教」と答える。この答えは、宗教へのリテラシー能力が足りない答え方である²⁰。「無宗教」と答えることによって不快な気持ちになってしまう宗教信仰者がいる可能性がある²¹。熱心な信仰者は、「無宗教」の人は神の存在を否定する、つまり自分の思想や価値と反する存在であると誤解してしまう可能性がある。そのような誤解を与えてしまうのは、日本人一般がそのような事実を知らないことや自国の宗教文化や価値観を十分に知らないことにあると考えられる。また「無宗教」と答えることによって、自身のイメージを下げってしまう可能性も存在する。「無宗教」と答えるのが無難と思う方もいるかもしれませんが。しかしながら、単に「無宗教」「神は信じない」と答えたのでは、「信じるものがない空っぽの人」「倫理観が欠如している可能性のある人」と、相手にマイナスの印象を与えてしまう可能性がありますので、注意が必要です。²²とのように、「無宗教」がどのようなものであるか知らない他の宗教を信仰する人々は上記のように感じてしまう可能性があるのである。また、「無宗教」と答えないことに、「なぜ何も信じていないと答えてはいけないのか。」「ウソをつくのはよくない」と考える日本人がいるかもしれない。しかし、「無宗教」と相手に伝えることの危うさを知らなかったために、入国できなかった若者の事例がある。「日本の若者が、1人で、サウジアラビアに入国しようとしてしました。入国書類の宗教の欄に、正直に「NONE」と書きました。「私は何も信じていない」と。入国できるどころか、別室に連れていかれて、そのまま、その日のうちに、強制送還されてしまいました。」²³という事例があるように、「無宗教」と答えることへのリスクをきちんとわかる必要があるとも考えられる。阿満（2004）では「「無宗教」という言葉ですますことができるのは、この日本列島のなかでの、いわば内部了解に属することであり、ほかの文化伝統のなかで生活している人には通用しない考え方であることをあらためて認識せねばならないであろう。大切なことは、「無宗教」という言葉にとらわれることなく、その言葉が指し示している現実を正確に理解することからはじめることではないか。その上で、なぜ日本人の多くがその宗教心を「無宗教」という表現にとどめておいて平気なのかを問わねばならないであろう。」²⁴と述べている。

日本人の多くは日本の宗教文化や価値観を知る必要があり、それを「無宗教」に馴染みがない、他の宗教を持つ人々に語れるようになると、国際的な交流をする際、誤解を生むことなく、より有意義な交流ができるのではないかと期待できる。

さらに、国際的な交流をする際、相手の信仰に対し、寛容な心で接することができる必要があるとも考えられる。

先述したが、ほとんどの日本人は日々の生活の中で、無意識に端から見ると宗教を信仰しているかのような態度を取る。例えば、お宮参りや七五三、成人式などの通過儀礼、お盆や初詣の行事のようなものは神道や仏教を信仰している人のような行動である。また、結婚式を教会で行なったり、クリスマスにはクリスマスミサに参加したりする人々もいる。そのような行動はキリスト教を信仰している人のような行動である。そのため、日本人は仏教、神道、キリスト教に対しては馴染みがあり、あまり違和感を覚えないが、イスラームやヒンドゥー教といった日本で馴染みのない宗教に対しては違和感を覚えることがある。例えば、日本人は、イスラームに対して、「変わっている」「面白い」というような違和感を感じることもあるかもしれない。その違和感が相手に伝わるようなことがあったとしたら、イスラム教徒の中には、気分を害してしまう人もいであろう。しかし、イスラームの六信五行の行いが自分を律するためであり、アッラーが常に自身を見ていてくれるという意識から行われるものであり、死後に天国に行くための善行であると考え、イスラム教徒が真面目な信仰を持つ人々であるということがわかる。興味を持つことがあっても、変わっているなどと思うことはないだろう。宗教を知る際、行為のみに着目するだけでは、信仰に対して寛容な心を持つことが疎かになる。自分とは異なる信仰に対して寛容な態度をもつためには、その背景となる思想を知るべきであると考えられる。その背景となる思想を知る機会はあまりないのではないだろうか。

また、これは多くの日本人の信仰の在り方にも言える。日本人一般の信仰は、世界の中でも特異なものである。ヒンドゥー教や民族宗教のように沢山の神様がいるだけではなく、キリスト教や仏教に対しても信仰心がある。そのような民族は稀である。そのような日本の信仰は、熱心な宗教信仰者の目には、信仰を冒瀆するような態度に見えてしまう可能性もあり、また、嘲笑の対象になる可能性もある。相手の信仰に対して寛容な心を持つことは、自身の宗教観を蔑ろにされないためにも必要だともいうことができる。

②宗教を信仰しているという意識が薄い日本人一般でも、宗教はなぜ信仰されているのか、「死」をテーマにして、理解できるようになる。

①で自分とは異なる信仰に対して寛容な態度をもつためには、その背景となる思想を知るべきであると考えられる。と述べたが、その背景となる思想の例として「死生観」が挙げられる。例えば、イスラム教徒は他宗教より敬虔な信仰者が多いイメージを持つが、それは「死」に対して触れる機会が多いためではないだろうか。日本は、今は平和な国であるが、イスラーム諸国では、紛争や争いが起きる国や地域がたくさんあり、人はいつか死ぬということを意識する機会が多くある。しかし、毎日「死」と向き合うことは辛いことである。イスラム教徒は「死」と向き合う辛さを緩和させるために、宗教を信仰し続けているとも考えられる。イスラームだけでなく、キリスト教も仏教も、神道も、輪廻転生や蘇り、極楽浄土、天国に行くという死後の世界について考えている。イスラム教徒だけでなく、キリスト教徒の多くも死後の世界が良いものであると約束されることに意義を感じ宗教を信仰した人が多くいる。また、仏教の教祖となるブッダは生老病死の苦しみから逃げるために出家し悟りを開いた。そのような人物像が共感できるとされ、仏教の信者、聖職者は日本でも多いのだと考えられる。どのような宗教でも、死生観についての見解があるため、宗教と死生観は密接なつながりを持つと考えられている。信仰内容、経典は違えど、「死」は様々な信仰心を探るきっかけになりうるのではないかと推測できる。また、宗教を信仰しているという意識が薄い日本人一般でも、死が怖いという気持ちを持つ人は少なくないため、宗教を信仰するという気持ちが何か理解できると考えた。

③では、1.5で設定した宗教リテラシーの段階である、第三段階につながる能力を養う。信仰への理解や宗教に対して寛容な心を身につけることによって、多様な宗教を持つ人々との交流をうまく行えるようになる。

3.3. 授業の概要

本授業は国府台女子学院で2018年11月に実践した。受講者は中学部2年3組37名、高等部2年3組44名、高等部2年5組41名である。授業の概要を表1にまとめた。

3.4. 授業の考察

授業の考察は、授業内の生徒の回答、様子、事前事後アンケートの結果を用い検討していく。授業の流れを辿りながら、下記より考察をはじめます。

はじめに、この授業の意図を軽く説明したあと、マンガ教材を数ページ読み進めてもらったが、マンガの世界観に戸惑うことなく、授業を受けた生徒が入り込めたと感じた。マンガを読み慣れている生徒と普段マンガを読まない生徒との読む速さはそこまで差異がないように感じた。生徒はほとんど同じペースで読み進めていた。

表1 授業の概要

	主な学習活動
導入	教材の使い方を知る。
展開1	教材の内容を通して、日本の宗教の文化が多様なようにイスラームの宗教文化も現代の流行を取り入れるなどして楽しむ工夫をしていることを知る。これにより、イスラーム（他宗教）の厳格な印象を見直す。 日本では、生活の中にどのような宗教があるのか、具体的に挙げていく。これにより、日本の宗教観を見つめ直すきっかけとする。また、日本の宗教観は、他国の宗教観とは異なることに気づく。
展開2	日本人一般の死生観を読み解くことで、自身の死生観を見つめ直す。ここでは、各宗教上での死生観を知り、自身の宗教観はどの宗教に近いか考えた。 宗教は死生観との繋がりがあつたことを知る。宗教があつたことで、救われる人もあつたことを知る。
まとめ	感想を書き、学んだ内容を整理する。

数ページ読んだところで、ムスリム・ロリータについての説明を挟んだが、知っている生徒はおらず、感想では「宗教は硬いイメージがあつたので、ムスリムロリータびっくりしました。」という意見や「イスラム教の人たちがファッションを楽しんでいるのは意外だったし、発想がすごいなあて思った。」「イスラームのイメージがかわつた」などという意見が多く見られ、生徒のイスラームに対してのイメージの変容は十分に見られた。ムスリムロリータを説明した内容は図3で示す。

また、イスラーム世界と日本の関係について「漫画を見たことによってムスリムの人たちが意外と日本と関わりがあることがわかりました。」「宗教というイメージはすごくかたいイメージだったんですが、ムスリムロリータなどを知ってすごく身近にあるんだなあと感じました。」という意見が少し見られ、ムスリムロリータやポケモン例を用いることで、イスラーム世界と日本の関わりを示すことは可能であつたと考えられる。下記が授業内で、授業者が行つた説明である。

T1「ムスリムの人って、ヒジャブとか、黒い布を身にまとっているイメージを持つ人が多いと思うんだけど、こんな感じで、ムスリムも工夫しておしゃれしたりね、文化も多様化しているってことをここでは伝えたかったんだ。」



図3 ムスリムロータ漫画内説明

次に、「日本の宗教スタイルってどのようなもの？」
「日本では生活の中にどのような宗教がある？」という
発問を受け、生徒は、日本人の生活の中にある宗教文化
を挙げていった。

生徒から挙げたものとして多かったのは、初詣、ク
リスマス、ハロウィンであった。これらをほとんどの高
校2年生の生徒は必ず自分の回答として挙げており、中
学2年生は3つのうちの1つが自分の回答として挙げ
ていた。この3つ以外に多く挙げられていたのが、合
掌礼拝であった。国府台女子学院では、毎日朝礼の時間
に合掌礼拝を行うため、それを思い起こし、解答してい
る生徒が多かった。しかし、中学生のほとんどは合掌に
対し、気持ちをこめないという回答を受けた。気持ちは
入っていないが習慣にはなっているということがわか
った。高校生では、合掌に対し、気持ちを込めるかどう
かは個人差が見られた。この個人差を生徒にうまく伝え
るために、周りの人と意見の共有の時間を作っても良か
ったと感じられた。その他にも、お盆やお葬式、結婚式
などが挙げられていた。高校生は特に、様々な宗教行事や
行いを挙げられていたため、この発問で、日本人の生活
の中に、無意識のうちに宗教が存在していることに気づ
くことができたのではないかと考えられた。日本の宗教
観が他の宗教観を持つ人々とは異なることに対するの
意見はほとんど見られなかったが、「宗教はたくさんあ
ってそれぞれ信仰しているんだと思った」というような
意見から、信仰のあり方の違いに気づけた生徒は多くい
るよう感じられた。「日本人が言う無宗教ってどのよ
うな意味を持つの？」という発問を用意した。高校生は
自分の言葉を用いて「決まった宗教に属していないので
いろんな宗教の行事をやったり、考え方を複数取り入れ
ることができる。」のが無宗教というように、無神論者
との違いを示したり、様々な宗教を取り入れ、独自の宗
教文化を形成している日本の宗教観を好意的に受け止
める生徒が多いようであった。中学生では、自分の言葉

で説明することを難しく感じた生徒もいたため、無回答
も見られた。無宗教と無心論者の違いがわかるにな
ったが、グローバル化社会の中で、自身の答えが、思わ
ぬ誤解を生む可能性があるという危機意識は意見には
見られなかったため、説明が必要な点であったと感じた。

第二話に入り、次の活動になるまでしばらくマンガ教
材を読む時間をとったが、中学生の中にはマンガ教材に
飽きてしまい、目を通すだけの生徒も出てきてしまった。

生徒の次の活動は、人は死んだらどうなるのか、日本
でも馴染みが深い、仏教、神道、キリスト教とイスラ
ムの4つの宗教が持つ死生観を参考に、宗教を通した死
生観を読み解き、自身の死生観とすり合わせる活動であ
ったが、議論を深めるためには、もっと時間が必要であ
った。だが、短い時間で、死生観と自分の意見をすり合
わせることができた生徒が半数いた。生徒の中には、仏
教と神道の考え方が近いという意見を持つ人が多く見
られたが、イスラームの考え方のように考えるというよ
うに答える生徒もいた。馴染みの深いものだけではなく、
新しい宗教思想や知識を踏まえて考えることができ
たと評価できる。特に、事後アンケートで生徒の三分
の二が死生観についての感想であったことから、生徒た
ちは、いのちと宗教のつながりを見出すことができ
ると読み取ることができた。そして、事後アンケートの
結果から、いのちと宗教のつながりを見出すことができ
ているのは、高校生が多いことがわかった。

アンケートの内容は、「無宗教」に関する問い、日本
人の宗教観に関する問い、宗教の知識を身につけること
に関する問い、宗教と死生観のつながりに関する問い、
それに加え授業後に感想を書く項目を設けた。「無宗教」
に関する問い、日本人の宗教観に関する問いでは、生徒
が授業を通して日本人の宗教観を見つめることができ
たかを評価する。宗教の知識を身につけることに関する
問いでは、生徒が授業を通して宗教知識が日常の中で
どのように役に立つか考えられたかを評価する。宗教と死
生観のつながりに関する問いでは、生徒が授業を通して
宗教の思想が、思考に与える影響に気づくことができ
たかを評価する。生徒の回答を具体的に見ていく。

高校2年3組の授業では宗教に対する感覚が変わった
という意見や宗教の死生観を知ることができたという
意見が多いことから、宗教を通して死生観を見ること
によって理解を深めることができたようであった。また、
宗教や死生観に対して、気づきや考えさせられたという
感想も多く見られた。どのような部分に気づきが見られ
たか、生徒の具体的な回答から考察を行う。ある生徒は、
「日本人は宗教と関わりのない人種と思っていたけれ
どよく周りを見ると他の国の人より多く関わっていると
わかった。」と答えており、日本人一般の宗教観を見
つめ直すことができていた。「今まで宗教について深く

考えたことがなかったけど、普段から宗教がかかわっているなと感じました。」と答える生徒や「今まで宗教は本当に必要なのかなと思っていましたがこの授業を通して必要性を感じました。」と答える生徒がおり、授業を通して気持ちの変容が見られた。また、「宗教を信仰していてもしていなくても人生の支えになっているならいいと思います。」と、自身の考えや価値よりも、他者の気持ちを尊重することができていた生徒もいた。さらに、この生徒は、宗教は死への恐怖を払拭できるかというアンケートに授業前はできないと答えていたが、授業後はできるかもしれないと答えており、思考の変化が見られた。

高校2年5組は、日本人一般の宗教観に対して認識を改めることができた生徒が多くいた。ある生徒「日本人は具体的な宗教がないと思っていたが、それは他の宗教が入り混じって、日本の文化が形成されているからだ分かった。」と答えており、同様の内容を回答している生徒が何人か見られた。また、他の生徒は、「私たちは多くの宗教を取り交えて文化を形成している。そんな私たちだからこそ、理解できることがあると思う。」と答えており、日本人一般の宗教観が可能性に満ちたものであると評価することができていた。その他にも「無宗教であることと無心論者の違いがよく分かった。自分が普段している行為にも宗教的な意味がないか注目してみようと思った。」と答えた生徒がおり、授業で学んだことを日常で活かそうとする姿勢が見られた。また、授業を通して、イスラームに対するイメージが変わった生徒が何人も見られた。ある生徒は、「私は、死というものへの恐怖を払拭しきれていません。しかし、無宗教、様々な宗教の行事を楽しむ日本人だからこそ、各宗教の多様な考え方を統合しながら避けることの出来ない死への恐れと向き合っていけるのではないかと思います。また上にも記したようにグローバル化している今日、私たちは宗教の知識を身につける必要があると思います。互いが互いを認め合い、矯正できる社会にするには、宗教を学ぶというのが1つの方法になりうるのではないかと思います。」と答えており、宗教を信仰する人の価値観を知ることを通して、自身の宗教観を再考し、価値観の違いを見出していた。また、「私達はもっと色々な宗教を知り寛容になるべきだと思った。」と答えている生徒もいたことから、生徒の中には、自分たちの宗教に対する意識を見直すことができていた人もいた。

中学校2年3組は、感想で授業の内容と関係の内容を答えている生徒が数人いたため、すべての生徒が集中して授業を受けることはできなかった。しかし、概ね授業に熱心に取り組むことはできていた。

しかし、授業を通し、宗教に対してのイメージが変わった生徒も多く見られた。中学生は、死生観と宗教観の

つながりについて、高校生に比べ「死」が身近に感じられないためか自身の死に対する見解を答えており、宗教を通して死生観を見ることがあまりできていなかった。

アンケート回答から見られる成果としては、授業を行うことで、無宗教の捉え方に変容が見られた生徒がしばしばいることである。「日本人は「無宗教」だと思うか」という問いに対し、回答者115人のうち24人が授業前と異なる反応を示した。授業の中では、あえて日本は無宗教であるとは発言していない。それは、日本は無宗教であるという事実が存在しないためである。そのことがあり、事後アンケートでは、悩みながらこの質問に答えた生徒が多く見られたようだ。また、事前アンケートで宗教を信仰する気持ちがわからないと答えた生徒20人のうち、11人がなんとなくわかると回答していることから、日常の宗教を扱うことによって、宗教を信仰するという気持ちに疎い日本人でも、信仰する気持ちがわかるようになる可能性を見出すことができた。

授業の反省点としては、活動が多すぎたことや、説明がおおざりになってしまった箇所があったことだ。これは授業者の反省すべき点であった。適切な活動量を選定することができなかったため、授業時間内にアンケートを答えることができない生徒もいた。

また、マンガを教材として使うことで、わかりやすく学ぶことができたという意見も生徒から見られた。特に、「マンガとってもわかりやすかったです。私は何も信仰してなくてもいいと思ったのですが、マンガをよんでたしかに家族になにかあったら宗教に頼りたくなってしまふかもしれないと思えるようになりました。宗教を信仰する人の気持ちを100%理解することは難しいかもしれませんが、少しずつでも理解していけるようになります。」というような回答も見られ、物語に入り込み、自身の考えを投影することができていた生徒もいた。

4. 授業の成果・課題

生徒の習得度の確認をするために、1.5.で述べた3つの段階を基準に、成果と課題を整理する。

第一段階を習得するために、授業の中で、日常の中で宗教性のある行為を生徒にあげてもらって活動を行った。生徒は、改めて日本の中に宗教文化があることに気づくことができ、回答を導いていたため、生徒は、この活動により、日本の宗教文化や価値観を知ることが十分に達成できたと考えられる。また、無宗教とは一体どういう意味で使われる言葉かを伝えることで、日本人一般の宗教観、無宗教の意味を他の宗教観を持つ人々に語れる能力を養うことができた。しかし、すべての生徒が無宗教の意味を書き出すことができなかったことやよく考えられていないと読み取れる回答があったことから、日本

人一般の宗教観を他の宗教観を持つ人々に語れるようになることは十分に達成できなかった。

第二段階は、高校生は自身が考えていた死生観がどの宗教に近いのか授業を通して考えることができていた。普段多くの日本人にとってなじみの薄いイスラームの思想を知った際に、イスラームの思想に共感できる点を見出す生徒もいた。中学生の中には、自身が考えていた死生観がどの宗教に基づいていたのか授業を通して考えることができた生徒もいたが、自身の死生観を考えたことがなかった生徒も多くおり、活動の最中に戸惑う姿も見られた。「死」に対してのイメージが想定できない生徒に配慮し、物語を扱ったが、生徒のイメージの補完は、物語を通して達成できなかった。

第三段階は、日本人一般の宗教観や文化を見つめ直すことによって、授業の前よりも、宗教を信仰する気持ちがわかると答えた生徒が増えた。授業を通して、日本人は特定の宗教を持たないため、宗教に対して寛容になれると考える生徒もいたことから、寛容な心を身につけることも概ね達成された。多様な宗教を持つ人々との交流をうまく行えるようになることができていたかは、具体的に宗教の知識を役に立たせることを目的とした活動を行うことがなかったため、成果として達成できたと断言はできない。

成果のまとめとして、3.4でマンガを教材として使うことで、わかりやすく学ぶことができたという意見も生徒から見られたことから、マンガ教材を用いることで授業の内容を可視化することや、生徒自身が当事者意識を持ち授業に取り組むことが可能となった。また、アンケート結果から、生徒の宗教に対する考え方にさまざまな変容をもたらすことが可能になったことが読み取れた。上記の2点が成果として挙げられる。

今後の課題を3つにまとめる。1つ目は、実践的に宗教の知識を役に立たせることを目的とした活動を十分に扱うことである。これについてはさらなる教材研究が必要となる。

2つ目は、マンガ教材等の物語を扱う際に、生徒の興味関心を意識した、より現実的な内容を扱うことである。

3つ目は、教材に頼り過ぎてしまったことである。教師が教材に書いてあることは、教師の口から説明する必要がないと教材の役割を過信してしまい、生徒が教材の内容を理解することができているか確認を行えず、結果、説明が不足してしまった。教材は、あくまで授業の展開の効率化やイメージを補うものであり、教師の役割を担うことはできないことを理解し扱うべきであった。

これらの課題を踏まえ、さらなる教材研究を行うことで、生徒の宗教リテラシーはより高まるだろう。

¹ 遠藤由美 (2015) 「グローバル化社会における共生と共感」エモーション・スタディーズ、第1巻、第1号、p.44

² 稲垣久和 (2002) 「国立追悼・平和祈念施設と公共の神学－ヤスクニ問題は解決するか－」日本クリスチャン・アカデミー 関東活動センター

<http://public-philosophy.net/archives/21> (最終確認 2019/03/25)

³ 脚注2に同じ

⁴ 文部科学省 (2009) 「グローバル化と教育に関して議論していただきたい論点例」(3) グローバル化と教育の関係 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/004/gijiroku/attach/1247196.htm (最終確認 2019/01/09)

⁵ 同上

⁶ 影山和也 (2015) 「公開シンポジウム「グローバル化と学校教育」を終えて」中国四国教育学会、教育学研究ジャーナル、第16号、p.22

https://www.jstage.jst.go.jp/article/csssej/16/0/16_21/_pdf (最終確認 2019/1/6)

⁷ 同上 p.22

⁸ 同上 p.23

⁹ 巽和行 (2017) 「我が国の国際化からグローバル化への課題」、グローバル化に向けて、『化学と工業』、Vol.70、No.5

<http://www.chemistry.or.jp/opinion/ronsetsu1705.pdf> (最終確認 2018/12/17)

¹⁰ 平本照磨 (2015) 『グローバル教育を考える』kindle版、I部グローバル教育を考える、三陽社、p.8

¹¹ 同上 pp.8-9

¹² 張瓊華 (2006) 「国際協力・異文化理解教育の実践に関する考察－埼玉県A高等学校を中心に－」国際基督教大学学報、I-A、教育研究

<https://ci.nii.ac.jp/els/contents110007324858.pdf?id=ART0009178807> (最終確認 2019/1/6)

¹³ 山中弘・藤原聖子編 (2013) 『世界は宗教とどうしてつきあっている』、弘文堂、p.2

¹⁴ 松村明編 (2006) 『大辞林 第三版』、三省堂

<https://kotobank.jp/word/リテラシー-658112> (最終確認 2018/12/22)

¹⁵ 脚注13に同じ

¹⁶ 吉川厚 (2005) 「ナラティブアプローチを使った教材開発」日本科学教育学会研究会研究報告書

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsser/20/2/20_KJ00004018532/_pdf/char/ja (最終確認 2019/1/6)

¹⁷ 同上、p.7

¹⁸ 同上、p.8

¹⁹ 脚注17に同じ。

²⁰ あさだよしあき (2018) 「1からわかる親鸞聖人と浄土真宗」海外で「私は無宗教です」はNGの理由 | 日本の常識は世界の非常識だった

<https://1kara.tulip-k.jp/buddhism/2017061991.html> (最終確認 2018/12/22)

²¹ さとうもえ・柴田柚香 (2015) 『まんがで学ぶ世界の宗教』、あさ出版、p.68

²² DMM 英会話 (2016) 「神様？信じてないよ」はNG！宗教に

ついての質問には英語でこう答えよう。

<https://eikaiwa.dmm.com/blog/26789/> (最終確認 2018/12/22)

²³ 阿満利磨 (2004) 『日本人はなぜ無宗教なのか』Kindle版、ちくま新書、pp.11-12

²⁴ 同上

謝辞

実験授業の場を与えていただいた、国府台女子学院の古賀克彦教諭、渡邊弓大教諭、そして筆者の授業に対して取り組んでくれた国府台女子学院の生徒にこの場を借りて感謝申し上げます。